

vol.16

選書者：谷川嘉浩

(哲学者)

●『群れから逸れて生きるための自学自習法』

著者：向坂くじら、柳原浩紀

通称『むれはぐ』。フェイ・バウンド・アルバーティの『私たちはいつから「孤独」になったのか』（みすず書房）とどちらを挙げるか迷って、『むれはぐ』の方にしました。この本は、「学ぶことは抵抗である」と語っています。「勉強することは、第一に抵抗である。ひとりで学ぶことができれば、あなたはそこではじめて自由になることができる。」

後半は教科ごとの勉強法の話。そういうノウハウが助かる人もいれば、興味のない人もいるかもしれない。だが、重要なのは前半の方。子どもはもちろん、大人にも読んでほしい一冊。

●『夏・ユートピアノ』

著者：ほそやゆきの

漫画雑誌『アフタヌーン』が主催している漫画の新人賞に「アフタヌーン四季賞」があります。これは、2021年にその大賞を受賞し、デビューした漫画家の短編集です。

表題の「夏・ユートピアノ」も、受賞作「あさがくる」も、どちらも未熟さや傷のようなものを抱えた人が主役として出てくる作品です。そして、「夏・ユートピアノ」は、まだ腕のない自覚のあるピアノ調律師が、世界的ピアニストの娘のためにピアノを調律する話。娘は他人とのかかわりを拒絶する引きこもりだが、彼女の抱えている寂しさの一片が、調律と演奏のくりかえしの中で少しずつ溶けていく。特に「あさがくる」は、宝塚音楽学校を4回受験してその道を諦めた少女が、宝塚音楽学校を志望する中学三年生に助言する役割を引き受けるところから物語が始まります。「道を間違えたんだ。私の行く道じゃ無かったんだ。もう引き返そう。」そう思っていたのに、女生徒への助言を介して「宝塚」に引き留められてしまう。

孤独を知る者同士の、ドライで親切的な結びつきが、それぞれのストーリーでは描かれています。その点については、「歩いてきた道を進むことも、戻ることもできないとき——ほそやゆきの「あさがくる」に寄せて」（雑誌『同朋』2025年6月号）で詳しく扱ったので、よければそちらを。

## ●『何もしない』

著者：ジェニー・オデル

アーティストのジェニー・オデルによる著作で、元のタイトルを直訳すると「何もしない方法：アテンションエコノミーへの抵抗」、バラク・オバマが評価したことで話題を呼びました。

全体を通して様々な話が出てきますが、次の二つが中心テーマです。①アテンションエコノミーがいかにか巧妙に私たちの好奇心や注意を乗っ取り、その働きを変えてしまったか。②アテンションエコノミーから、私たちはいかに距離を取るべきか。

バラ園で過ごしたり、バードウォッチングをしたりする時間に繰り返し言及しているのも特徴的。何もしない個人的な実践は、アテンションエコノミーの喧騒から距離をとる効果を持つだけでなく、自分固有のコンテクストを回復することにつながっています。オデルは、「何もしない」を通して、スマホ主導に構築されてしまった自分の知覚や注意のあり方を再編成することが大事だと主張しています。おもしろいよ。

## ●『働き方と暮らし方の哲学』

編：美馬達哉

何かに前情報や前評価なしに出会ったことって、最近ありますか。私はありません。誰かに連れて行ってもらったお店も、場所を調べるために地図アプリを起動すれば、ただちに評価が出てくるし、店の雰囲気も食事の内容も金額もわかってしまう。この本には、アテンションエコノミーについて論じた「プラットフォーム経済の生き方、読み方、抗し方：評価経済と集合的レーティングの問題をどう超えるか」が収録されていて、それは私が書いた文章です。アルゴリズムやレーティング抜きに作品や他者に出会うことが難しくなった世界で、どうやって「不意打ちの出会い」を確保するのかという話、だけではないのですが、いろいろ書いています。

私以外の文章も面白く、丁寧な暮らしやミニマリズム、ケアなど重要かつ面白い論点が扱われています。

●『増補改訂版 スマホ時代の哲学』

著者：谷川嘉浩

スマホを持ち歩く時代、利便性やさわがしい刺激と引き換えに、私たちは孤独を失っている。その孤独は避けたい「孤立感」のようなものではなく、自分自身と一緒にいる状態でもあるはずで、その価値と働きを理解する必要がある。騒がしく落ち着きのない時代に、無理して自己啓発でテンションを上げるか、ショート動画をマルチタスクで見ながらダルい気持ちよさに浸るか、アルコールで心を麻痺させて何とか適応するといった選択肢に私たちは飛びつきがちです。

そうでない大事な何かがあるのではないか。

哲学の観点から論じています。つながっていても寂しいのはなぜか。その答えは哲学にあった！

●『死なない猫を継ぐ』

著者：山中千瀬

異性愛とは違う感覚を抱いていると思われる人が詠む歌でできあがった歌集です。あなたとは違う感覚かもしれませんが、だからといって感情を揺さぶらないわけではありません。

瞬間的な感情の高まりと、ちょっとした疎外感。星や魔法、裏切り、伏線など、少し非現実的なフレーズが躍っている歌が多いのも印象的です。

とけるタイプの魔法だけ手に持っていてその手で垂らす線香花火

ちぎれそう 予告みたいにレスビアンと言えばこんなにとおい夕暮れ

交わす約束のすべてを裏切りの伏線だって笑う友だち

笑うときはじけるように背を反らすやりかた君の本性は夏